

## 人文地理 学界展望

## 松村嘉久「地域研究・地誌」

2002 年度の 21 世紀 COE プログラム「学際・複合・新領域」24 件のうち、5 件が「地域研究」枠で採択された。2004 年度の間評評価によると、「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」(京都大学)のフィールド・ステーション構想は評価されたものの、野外調査研究の方法論確立に向けての努力が迫られている。「地域立脚型グローバル・スタディーズの構築」(上智大学)や「現代アジア学の創生」(早稲田大学)では、標榜した「地域立脚型グローバル・スタディーズ」や「現代アジア学」が何を指すのか、明確にされていないとの評価を受け苦戦を強いられている。一方で、「地域研究所」・「地域研究センター」、あるいは「アジア」などの地域名を冠した研究機関を設ける大学も、80 年代から急増してきた。独立法人化や少子化への対応に向けて、既存の学部や研究機関の改組と産官学の連携が絡んだ時、「地域研究」という括りが安易な受け皿となっている感も拭えない。しかしながら、内実はさておき、「地域研究」が脚光を浴びている今日は、総合的学問を自認し「地域研究・地誌」を内向的に議論してきた地理学が、それらを解き放ちプレゼンスを高める好機と捉えられよう。

このような状況のなか、2004 年で特筆すべきは、若手・中堅研究者による精緻なフィールドワークに基づく成果が得られたことである。個人・農家レベルの実態分析から社会的ネットワークの重要性を説く筒井由起乃「ドイモイ期のベトナム紅河デルタ農村における経済活動と社会的ネットワーク」(人文地理 56-2)は、ステレオタイプ化されてきた紅河デルタ農村の自律性を突き崩す糸口を提示している。中国農村研究でも同様の議論が蓄積されており、今後は両者を比較する視角も期待される。同じ紅河デルタの環境変動を跡付けた春山成子『ベトナム北部の自然と農業』(古今書院)は、農業政策や治水事業への提言まで踏み込んでいる。山口哲由「チベット地域の乳加工」(人文地理 56-3)も、長期間におよぶ広域的な聞き取り調査をまとめたものである。中辻享「ラオス焼畑山村における換金作物栽培受容後の土地利用」(人文地理 56-5)は、土地林野分配事業と換金作物普及がもたらした意義や問題点を明らかにした。ラオス北部を事例とした YOKOYAMA Satoshi “Forest, Ethnicity and Settlement in the Mountainous Area of Northern Laos” (Southeast Asian Studies 42-2)は、林産物採集活動の観察から、伝統的な森林利用・エスニシティ・集落立地の関係に迫るユニークな視角を打ち出している。以上はいずれも、90 年代半ば頃まで現地調査が困難であった地域だけに、本格的なフィールドワークの成果を得て感慨深いものがある。また、中辻は GPS と GIS を駆使して土地利用図を作成し、YOKOYAMA も GPS を利用して位置特定しているが、地形図や空中写真の利用に制約の多い「第三世界」の地域研究にとって興味深い手法といえよう。自然地理学ではこのような手法や衛星画像・衛星写真の利用も見られたが、人文地理学における地域研究も技術革新に努め積極的に取り入れるべきであろう。

2004 年は中国研究も実り豊かな年であった。地理学評論の特集“Land-use and Land-cover Change in China” (地理学評論 77-12) では、土地利用・土地被覆変化をめぐる、HIMIYAMA Yukio “Achievement and Tasks of Research on Land-use Change in China” (地理学評論 77-12) が、中国の状況を目配りよく展望している。この他に、ランドサットデータから都市域拡大を概観した LIU Jiyuan and Deng Xiangzheng “An Overview of Urban Land Expansion in China in the 1990s Based on Remote Sensing and GIS Technologies” (地理学評論 77-12)、土地利用制度の変遷を丹念に跡付けた LU Qi, Wu Peilin, WANG Guoxia, and ZHAN Jinyan “On the Impact of the Changes of Social Ideology and Institutions on Land Use in China since the 1950s”, 鎮レベルでの土地利用の変遷と都市計画の関連に迫った JI Zengmin “Mechanism of Land-Use Changes in Yuqi Township, Wuxi City, China” (地理学評論 77-12)、米作限界線の変動から改革開放以降の食糧問題に切り込んだ MOTOKI Yasushi “Transformation of Grain Production and the Rice Frontier in Modernizing China” (地理学評論 77-12) など、日中地理学界の研究水準の高さと交流の深さを示す論考が並んだ。長江下流域の都市化の実態をフィールドワークや衛星写真などから分析した李増民『変貌する中国の都市と農村』(芦書房)は、中国の都市・農村関係の貴重な事例研究を豊富に提示している。地域固有の諸条件にこだわり、河南省鄭州市域を描いた石原潤編『内陸中国の変貌』(ナカニシヤ出版)とあわせて吟味すれば一層興味深い。北田晃司「植民地時代の台湾における都市システムの変容」(人文地理 56-3)は、植民地統治下の台湾と朝鮮の共通点と相違点を見出そうと試みている。

グローバル化・ローカリゼーションをめぐる議論も、マンガという身近な文化産業から

RIMMER Peter “Manga World: Globalization Theory Revisited” (人文地理 56-6) が、インド映画から SUGIMOTO Yoshio “Indian Cinema in an Age of Globalization” (人文地理 56-6) が、香港映画から OKUNO Shii “Beyond Martial Arts in Hong Kong Films” (人文地理 56-6) が、文化地理学の新たな可能性も散りばめつつ、親しみやすい題材を用いて、その諸相を分かりやすく説明することに成功している。島崎博『オーストラリア：未来への歴史』(古今書院)は読んで面白い記述であり、植村善博『図説ニューゼーランド・アメリカ比較地誌』(ナカニシヤ出版)は豊富な図表や写真でビジュアルに語りかけている。高校や大学における地理人気を高める鍵は、このようなサービス精神にあるのではなかろうか。この他に、北川眞也「場所とニューライト・ポリティックス」(人文地理 56-2)、吉田雄介「イランにおける家内工業の地域性の消滅と「絨毯モノカルチュア」の進展」(地理科学 59-2)、滝波章弘「ジュヌボワ・サボワイヤール地域にみられる国境の透過性」(人文科学研究 11)も、グローバル化と場所・地場産業・国境などとの関係に言及するものである。

「第三世界」における農作物の生産・流通を扱ったものとしては、インドを事例とした荒木一視「インドの野菜生産とデリーへの野菜供給体系」(地理科学 59-4)・同「インド・カルナータカ州における農産物卸売市場」(地誌研年報 13)、中国を事例とした荒木一視・柴彦威「北京市大鐘寺青果物市場の生鮮野菜供給体系(英文)」(経済地理学年報 50-3)と小島泰雄「南京近郊農村の野菜生産と労働移動」(神戸市外国語大学外国学研究所研究年報 41)があり、両大国の対比には興味が尽きない。この他にインド研究では、友澤和夫「インドにおける日系自動車企業の立地と生産システムの構築」(地理学評論 77-9)、日野正輝「インドにおける大手消費財メーカーの販売網の空間形態」(地誌研年報 13)も得られた。産業地域形成に関しては、斎藤功「カリフォルニア州チュラーレ郡における工業的酪農の展開と地域連関」(地理学評論 77-11)が、地域間の資源循環利用や酪農の経営者や労働者の民族的背景に目を配り、SAITO Yuka and TAKENAKA Katsuyuki “Development of Wine Industry in Spain” (地理学評論 77-5)が、先導的な企業の役割に注目して、そのプロセスを描き出している。一方、都市内部の地域分化やエスニシティ問題を扱ったものとしては、ITO Tetsuya “Areal Differentiation of Renewal in the Urban Residential Area in Germany” (地理学評論 77-5)、杉浦直「シアトルのアジア人街「インターナショナル地区」のビジネス動向と地域的分化」(季刊地理学 56-2)、福本拓「1920年代から1950年代初頭の大阪市における在日朝鮮人集住地の変遷」(人文地理 56-2)、山本健兒「ベルリン在住トルコ人の日常生活と生活意識」(地誌研年報 13)などが得られた。国際人口移動では、限られた統計資料を苦心して分析した戴二彪「中国新移民」の移出地構造の変動」(経済地理学年報 50-1)、アンケートや聞き取り調査から行動論的にアプローチした Raelyn Lolohea ‘ESAU “International Migration from Tonga, South Pacific” (地理学評論 77-5)といった対照的な成果が得られた。

さて、最後に「地域研究における地理学」のプレゼンスを高めるための私案を簡単に述べて終わりたい。これまで挙げてきた諸論考は、その内容や水準とは無関係に、地理学界内部で完結する傾向が強く、学際的・総合的アリーナ(例えばアジア政経学会や現代中国学会など)で地理学者による地域研究を見出そうとするならば、一部の個人レベルの成果は認められるものの、その数と影響力は皆無に等しいといわざるを得ない。「地域」を自明の研究対象としてきた地理学は、地理行列を想起すれば明らかなように、地域研究の二本柱たる「学際性」と「複眼的思考」を総体として内在しており、レフリー付き雑誌が豊富なこともあり、築き上げてきた実績も分厚く磁場も強力である。私の印象では、空間的パースペクティブと地図化のみを武器に、広義の「地域研究」アリーナに打って出ても十分に通用する。「地域研究における地理学」のプレゼンスを高めるためには、まず何よりも、アリーナに出て積極的に発言することが重要であろう。地理学界の磁場を守る営為が今後とも不可欠なことはいまでもないが、昨今の大学や大学院の教育システム改組の進展で、既存学問領域の境界が曖昧になり、混沌が加速されることは目に見えている。できるならば、個人レベルの努力として境界を踏み越えるのではなく、学界の組織戦略としてそれを促進する姿勢を打ち出すことも、必要ではなかろうか。新たなアリーナで遭遇する問題を、「地理学における地域研究」にフィードバックすることにより、地理学の未来の一端も見えてくるような気がする。とりわけ、「地理学の地域研究」では、論文執筆にあたって、膨大なフィールドデータが系統地理学の議論の流れを意識するなかで取捨選択される。捨てるを得なかったデータのなかには、新たなアリーナで違った切り口を見出せば、重要な意義を持つものも少なくなかろう。複数の地域や分野を縦横断する知識を身に付けることが理想であるが、それが議論されるアリーナに立ち触発されるのが近道であろう。(松村 嘉久)